

動物にことばはあるか

「動物のことば・人間のことば」

宮岡良成

(三省堂国語教科書編集委員)

動物にことばはあるでしょうか。これまで多くの学者たちによっていろいろと研究がなされてきました。今回の教材とは違った観点で、「動物のことば」と「人間のことば」を比較してみましよう。

まず人間が使うことばは自由に組み合わせたり、並び替えができたりすることに注目

できます。「今日はおなかがすいた」という文は、「今日はおなかが痛い」「昨日はのどがかわいた」とも「おなかがすいた、今日は」ともいえます。これに対し犬の鳴き声はことばだと仮定してみましよう。「あの肉がうまい」という意味で「ワンキャンタン」と叫んだとします。しかし、これを「クワンキャン」(うまい、あの肉はとか「ワンキャンインケン」(あの骨がうまい)とか、変えることはおそろくできないでしょう。ですから、ことばではないと考えます。さらにことばを使って「うそ」をつくことができます。ある意味文学は「ウソの芸術」でしょう。現実とは関係のない世界を巧みに描くことができます。これに対し、犬のある鳴き声で他の犬をだますことはできるかもしれません。しかし、犬がそれこそ自由に空想を展開したり、物語を考えたりするとは考えられません。

また、ことばを表記できることも注目すべき点です。もちろん、文字をもたないことばも世界中に数多くあります

(身近なところではアイヌ語も文字はありません)。動物の中に他の仲間になんか知らせようと、匂いをつけたり、ちよつとした印をつけたりすることはあるかもしれませんが、しかし、動物や昆虫たちがさまざまな場面で文字のようなものを使って何かを「自由」に記した例はありません。動物が「物語」を作るとは考えられないのですから、当然それを何か記すということはありません。

ソシユールという言葉学者が指摘した「ラングとパロール」という概念があります。荒っぽくまとめると、ラングは社会的な決まりとして一定の約束のもとに成立したことばの体系であり、パロールは個人が使っていることばです。このラングに注目してみましよう。この概念は動物にはあてはまらないでしょう。ことばを自由に組み合わせたり、並び替えができたりするのも、文字を使うのも、人間が一定の約束事として了解しているからです。はたして、犬が鳴き声の体系を作りあげ、同じ仲間どうしでその体系を用いる約束を果たしているといえるでしょうか。

今回の教材で、筆者は、動物が「約束する者と約束される者」などの二重の観点を同時に生きているか、生きるこどができるのか「私の興味ではない」といっています。しかし、動物はその二重の観点を同時に生きていることはできず、動物にことばはないと考えてよいでしょう。

みやおか よしなり 東京都立つばさ総合高校教諭。